

通信クラブ



## 各部の出演者、出展者を募集中です

募集要項は春季号参照。日程や会場などは裏表紙の内側に記載してあります。

各県医師会の芸術活動を

お知らせ下さい

美術展に出展された山崎嘉弘先生(静岡)から、浜松市内で活動している医師の美術クラブN会がありますと、情報が寄せられました。メンバーは十数人ということです。

江川政昭先生や川堀耕平先生らが活躍している広島と岡山西県の医師グループでも合同の会があります。どうぞ、そのようなグループの情報をお知らせください。

## 美術展と総会 賑やかに終わる

新会場「悠玄」へは大勢のお客様が見えられ、無事に終了しました。搬入から搬出まで、これまでとは違つので、戸惑いもあり来年度への課題も残りました。

うれしかったのは、総会が一筋隣のレストラン「高松」だったので、総会開会の前後に他部の会員が連れ立って見えたこと、また新入会員の出来先生が夫人とともに来られ、今後も音楽会や展覧会々々場を積極的に訪れたいと語られていることです。もちろん、これまでも木内徹子先生が出品(あじさい)されていますので、洋楽(マンドリンアンサンブル)のお仲間が必ず見えますし、逆に邦楽祭に

高橋妙子先生が出られると、これまた応援に三越劇場へ駆けつけるなど、交流はありましたが、一部にとどまり乏しかったことは否めません。ぜひ、これからは写真部・書道部のもならず、どしどし交流を深めていきたいと思えます。

## 得意の奇術を披露しました

安彦洋一郎先生が

7月5日の総会の席で手品を披露されました。写真、カード、やひもの小技から、白ハトまで飛び出すが、本格的な法まで、皆さんの喝采を浴びていました。



8月21日に下打ち合わせ

音楽の友ホール

洋楽部ドクターズ・ファミリーコンサート(10月11日=日)の会場へは、去る6月に下見をしました。今回は担当者と実際の運営について打ち合わせをします。ご出演予定の方々に、何かご希望がありましたら、事務方までご連絡下さい

## 邦楽祭の出演者決まる

初登場は秋葉則子先生

恒例・勤労感謝の日11月23日は、三越劇場での「医家邦楽祭」。去る7月25日に、お馴染みの南国酒家・原宿本店で打ち合せ会兼懇親会を行いました。

ことしは日本舞踊が2、清元1、長唄3、4、小唄2、仕舞(謡)3となつていきます。舞踊は飯田文良先生が3年連続で、大川尚美先生も久々の登場です。番組紹介は次号で。一方、長唄は美術部の秋葉則子先生が初エントリー、お師匠さんと「吾妻八景」を弾かれます。この日は、札幌で開催された日本医師会の「男女共同参画のシンポジウム」に出られるため、お見えになれませんでした。

問題は来年度、皆さんとも「元氣なつちは相務めます」という台詞が帰ってくるのですが。ここは一つ、若手の山崎律子先生、大川先生、鈴木啓之先生らに頑張っていたただかないと……。

## 訃報

古屋 為男氏(東京) 3月16日死去  
80歳。長年、作品を写真展に出品されてきました。夫人から「生前のご厚誼に深謝もつしあげます」と、懇切なご挨拶がありました。それによりますと

若いときに胃潰瘍の手術で輸血を受けC型肝炎を発症、70代からはリンパ腺腫など闘病生活。2005年ごろからは不整脈でペースメーカー装着。6年11月症状が安定し海外旅行へ出かけましたが肝腫瘍破裂で激痛のため急遽帰国し手術を受けられました。今年に入り体調を崩して2月末に入院。治療されておりました。ただ30年来、国領(調布市)で開業患者様のためにと治療の合間には現場に復帰“生涯現役”を貫かれたといつてです。(文責)

新入会員カッコ内紹介者・敬称略)

本田 英輔 〒162・0067 東京都

新宿区富久町36・19 本田芳働衛生コ

ンサルタント事務所 書道部 内科・

神経内科 (昨年、書道展会場で)

中野 一義 〒160・0022 東京都

新宿区新宿1・35・12 カテリーナ新宿

御苑506 写真部 内科(大武秋筈)

佐々木 正 〒166・0003 東京都

杉並区高円寺南5・26・14 写真部

整形外科 (大武秋筈)

澄川 和美 〒187・0041 東京

都小平市美園町1・30・5 美術部(写

真部 耳鼻咽喉科 (白矢勝一)

村野 光司、村野 和子 〒187・00

11 東京都小平市鈴木町2・161・

72 文芸部 薬学 (白矢勝一)

訂正 新入会員紹介で

新谷周二先生の紹介者は津久台喜一郎先生ですが、丸井央一先生は白矢勝一先生でした。また生田義和先生(広島)は未入会でした。関係者一同にご迷惑をおかけしました。お詫ひして訂正いたします。

# 透視像

「とは」と「かな」 太田 伶

百人一首をもとにした千早ぶるといつ馬鹿々々しいが、それが身上的落語がある。千早と神代が花魁の源氏名、竜田川が関取といふことで、うまく話をでっち上げた大家さんが最後に「とは」とは何ですかと八さんにきかれ、困った揚句とは、」は千早の本名だ、でオチとなる。元歌でも「とは」は重要で、その一言で作者の驚嘆が如実に伝わり読者にも、からくれないにくられた竜田川的情景が活写される。

最近マックミノンピーターといふインランド人が百人一首を英訳している(集英社新書)。日本人も二舎をさけるほどの造詣の深さで百人一首の理解度に見事といふのではないが、それでも日本語の難しさ随所に見られる。由良の門を渡る舟人梶を絶えゆくへもしらぬ恋の道かな

は次のように訳された。

Grossing the Straits of Yura / the  
boatman lost the rudder / the boat's  
Adrift / not knowing where it goes / is  
the course of I lose love like this ?

この歌は恋愛を梶を絶えた舟にたとえたものではない。梶を絶えた舟人自身つまり恋の闇路に迷っている作者自身の煩惱を歌ったものである。だからこの英訳の末尾は *course of my I lose like this*。よべきびその詠嘆「よびかな」なのである。よびこの著者の千早ぶるとは、このように訳された。

Ever the almighty gods of old / never  
knew such beauty / on the River Tatsuta  
in autumn sunlight a brocade / reds  
flowing above, blue water below

最後の句がみよべんとといふ情景になつてくるかどうかは疑問だが「とは」は such beauty と表現された。それでよびこれが本語に「とは」といふのは驚嘆になつてくるかどうかが。

いずれにしても「とは」とか「かな」のたつた二文字の副詞がかくも和歌の本質を決定づける力を持っているとは、日本語とは、何とも恐ろしい言葉ではある。

## 編集後記

夏季号は美術展特集です。各作品を方ラーで紹介。せめて、もう一回り大きいとよいのですが。絵に対する取り組みなどを執筆してもらった他、白矢美術部委員に感想を寄せてもらいました。

秋のイベントは秋季号との組み合わせが悪く、冬季号にズレますが、各部の催しも経過報告だけでなく、どのように活動しているかの視点も加えまじつて。

問題は新型インフル、不特定多数のお客様が見えるわけですから、猖獗しないよう皆様の力で抑え付けてください。内容に触れる紙幅がありません。今回は長編が多く、頁負担金を出してやるつといふ、温かい声援と受け止めました。猛暑が続きます。御身お大切に。